



信友会会報

2009年8月

<<7月例会より>>

信友会7月例会は久しぶりに証し会を開きました。

田中久雄兄はネパールでのみつまた栽培事業やフィリピンでの水道プロジェクトの支援、国内では心身障害者自立支援施設「共働学舎」の支援など多くの社会貢献を果たしています。祖父母から受け継いできたキリスト教信仰と奉仕の精神、自由学園での学び。本業の出版者経営のほかに、国内外で行なってきた支援事業を通して見てこられた活動の状況や課題について、語っていただきました。

信友会 7月例会

「これまで歩んできた道、国内外での支援活動から」 田中 久雄 兄

信仰と奉仕の精神のルーツ

私の人生について語るときには、母方の祖父母の生き方まで遡る。祖母の落合うのは、「婦人の友」「自由学園」「友の会」を作った羽仁もと子にあこがれて、大阪から上京し、「友の会」の忠実な奉仕者になった。その活動のなかで、昭和初期の大恐慌時代には、東北のセツルメントで奉仕活動を行っている。戦後、自由学園のある東久留米市に居住して、近所に住んでいた左近孝枝先生の紹介で、阿佐ヶ谷教会に出席するようになった。

1955年に夫妻一緒に大村勇牧師から受洗している。阿佐ヶ谷教会創立65周年記念「阿佐ヶ谷教会の歴史を生きた人々」に大村勇牧師が書かれた文書があり、祖母の「うの」が優れた婦人で、謙虚熱心な求道者であり信仰も進んでいたこと。また、自らの希望で病床にあった夫幹三郎と共に受洗した経緯が残されている。私の母武子は、1921年に自由学園の1回生として入学したので母からも羽仁もと子の思想を継承することになった。



私は、1937年（昭和12年）に自由学園初等部に入学した。大学時代から、器用さをかわれて自由学園の電気工事、設備修理など営繕部門を手伝っていた。

自由学園の校風は、「生活即教育」であり、中学に入ると全員寮生活となり、先ず、一ヶ月かけて寮で使う自分の机とイスを工作することから始める。あえてキリスト教主義を標榜しないが、毎日礼拝があり聖書を読み讃美歌を歌い、園長の話聞いていた。無教会系のキリスト教思想を持っている。私にとって自由学園の教育と祖父母からの信仰を受継いだことが、後に述べる社会奉仕活動を支えた。

昭和28年に大学卒業し、父の家業（洋画材料販売）に加わり、学生時代から携わった自由学園の営繕の仕事も続けた。昭和46年に父の事業が事情で整理することになり、母方の事業であった政府刊行物を販売する大阪府官報販売所の仕事に携わるようになった。自由学園の仕事も継続したので東京と大阪の両方に拠点をおく生活を続けた。1975年に取締役、1985年に代表取締役に、1994年に商号を「株式会社かんぼう」に改めた。この会社では、信友会が2006年に発行した信友会報名作集「ハレルヤ」の印刷を引き受けた。

自由学園を卒業するまでは、学園の方針の無教会派のキリスト教の中で育った。阿佐ヶ谷教会には、妻三知子との結婚の司式を大村勇牧師にお願いしたこと、父の家業の整理により精神的拠りどころを求めたこと、友人の左近さんのご家族、自由学園同窓の永田晨さん、木下良作、昌子さんご夫妻の力があり出席することになった。昭和48年のクリスマスに大村勇牧師から洗礼を受けた。

ネパールでみつまたによる村おこし

ネパールの植林事業については、1988～89年の2年間アジア協会アジア友の会が行うワークキャンプに参加して、その実体を知り失望感を持つことになった。各国の団体が行う植林活動は、ネパール側は寄付を沢山してくれるところは「良いグループ」、苗木が育っても育たなくても関係なし。日本側は植林をして写真に



取るだけで、木が育つことに興味が無かった。1990年春、大蔵省印刷局の源氏田局長からアイデアをいただき、原産地がヒマラヤの「みつまた」で村おこしをすることを考え、自由学園長の羽仁翹さんと共にみつまた植樹のプロジェクトを立ちあげた。

みつまたは、標高2,000メートル程のNangi, Jiriなどの村に自生している。ネパールの生活環境やトイレなどは日本の昭和の初めの田舎の環境と同じであったが、自由学園で鍛えられた生活順応の訓練であまり驚かずに済んだ。最初にネ

パール人から、あなた方が始めようとしている紙の原料はロクタだという。しかし、どうも辻褄が合わない。それを解決するのに数年かかった。そして、Jiriの山中でみつまたが自生しているところを見つけてたいへん感激した。日本では、和紙の原料は「こうぞ・みつまた」であるが、「こうぞ」は桑科で繊維が太く丈夫なので障子紙などに、「みつまた」は沈丁花科で繊維が細いので書道用紙や紙幣に使われている。

現在までにネパールで、60～70の村々でみつまたを植林、加工方法を教えた。特に水洗いを徹底させて良質の製品を生産できるようになった。1996年には、初めて日本にみつまたを輸出するまでになった。紙漉き技術の教育も行い、和紙の生産ができるようになり、阿佐ヶ谷教会カレンダーもネパールで和紙を生産し印刷されたものである。

一方、このプロジェクトで出会った近藤亨さんの、「ムスタン地域開発」のNPOを副理事長として応援することになる。ムスタンの中心地ジョムソンは、ネパール西部のヒマラヤ山脈の峠を越えたチベット国境の標高2,800メートルの辺境の地にある。そこでの果物、農業指導のプロジェクトに、信友会員で山一証券を退職したばかりの高山保さんに事務局長として参加していただいた。この地方では、アメリカなどが巨額な資金と投入して行った植林事業は失敗していたが、我々のプロジェクトは、経験豊かな近藤さんの農業技術によりチューリップの栽培やりんご、ぶどうなど果物の栽培に成功し、野菜、花卉農場、りんご農場、ぶどう農場などが9つのプロジェクトとして成功した。

その後、私は近藤理事長と考え方の違いからこのプロジェクトを離れた。私は、技術指導を通して、途上国の人々が自ら収入を上げる方向での地道な支援を希んだからである。

フィリピンでの水道事業

1991年からは、アジア協会アジア友の会がフィリピンのパナイ島 Pandan 町で水道プロジェクトを行うことになり、リーダーを引き受けた。竹槍で目を突かれた婦人がいるなど太平洋戦争の傷跡が残り対日感情は悪かった。現地では、「町内で井戸を掘って欲しい」だったが、調査の結果を信友会員で筑波大学教授の

池田宏さんに示してアドバイスをいただき、町から10キロ山に入ったマロンパティ水源からポンプアップすることにした。工事費は当初の井戸堀の1,500万円から山からの導水方式の8,000万円と増額になりアジア協会では最大の工事になった。これらの工事は全て人力で行われ、住民と一緒に工事を行うことで悪かった感情も徐々にほぐれ友好的関係が築かれていった。

1998年に水道工事は完成し、8年間の共同作業で感情的なもつれがとれた。完成式典と同時に、日本軍の「無名戦士の墓標」を建立することができた。このエピソードは、中学の公民の教科書の教材として取り上げられている。



フィリピンでの水道プロジェクト

みつまたによる村おこしの進展

1998年には、Nangi村の中学校から、みつまた栽培による収益で教材を買うことを提案され、現地を見に行くことになった。Nangi村は2,800メートルの高地にあり、800メートルのBeni村まで車で行き、そのあとは徒歩で10時間かかった。Nangi村では来ないものと思っていたが、我々の到着をみてその熱意に驚いていた。ここで私が見た学生寮は、4畳半位の粗末な掘っ立て小屋にベッドが2台、炊事場がついていた。このような貧しい環境を改善するため、援助を惜しむまいという思いを強くした。

2008年に国立印刷局は、紙幣の原料には日本産みつまたのみ使用する方針を転換して、外国産みつまたも使用することになった。現在は、国立印刷局の使用量は百数十トンであるが、国内では3割程度しか調達できなくなっている。国立印刷局は、ネパールと中国の視察を希望したので両国を案内した。ネパールでは、水洗いが行き届いており良質な製品の評価をいただいた。我々は、ネパールでの20年もの関わりから住民との友好関係が築かれ危険を感じていないが、視察中にJiri村の近くで道路工事による通行止めがあり、監督が坂の上の現場が見せたいと言うのでそこを通過した。後でその監督がマオイスト（毛沢東主義者）であることが分かったが何の問題も起らなかった。日本での指示は、「マオイストに会ったときは100ドル渡して逃げる」であったと言う。ネパールでのみつまたの質や加工技術は、日本と同等と評価された。また、みつまた改良の



ためのバイオ技術を学ぶため、2人の研修生を徳島の池田町の高校に派遣できるまでになった。

共働学舎での働き

自由学園の先輩の宮嶋真一郎さんは、1973年に心身に障害を持つ人々が共に生活し、働く場を提供する「共働学舎」を立ち上げた。長野県小谷村、北海道の新得町と小平町寧楽に施設を持って160名ほどの心身障害者を受け入れ運営してきた。この団体は30年間任意団体で運営され、宮嶋さんも高齢になったため、社会的立場を考慮して2006年に

特定非営利活動法人の登録を行い、私が初代理事長に指名された。3年間この運営に携わり今年3月に退任したが、古くなった施設のリフォームなど環境整備を行った。

共働学舎は、「競争社会ではなく協力社会」をモットーにして、障害者が生きいきと生活できる環境を目指しており、祈りから始まる生活を送っている。小谷村の施設は、春からは農業を、冬は工芸と木工を行い自立率は23%である。北海道の新得町の施設は、ブラウンスミス種という乳脂肪の高い牛を100頭飼育し、ナチュラルチーズを生産している。ヨーロッパの食品コンテストでモンドセレクション（金賞）を何度も取っている。昨年の洞爺湖サミットでは、このチーズが振る舞われた。自立率は70%で販売の方法などを工夫する必要がある。小平村寧楽の施設は、豚を300頭飼育してソーセージや生肉を販売し、堅実に経営されている。自立率は90%と高い結果を得ている。

私は、本業の官報、政府刊行物の販売のほか、このようにネパールやフィリピンでの支援活動、共働学舎の運営などを行ってきた。その源泉は、祖父母から受継いだキリスト教信仰と社会奉仕の精神、自由学園で学んだ生活即教育と言う精神である。途上国の人々の自立や共働学舎のために、喜びをもって奉仕することができると思っています。

（文責：玉澤武之）